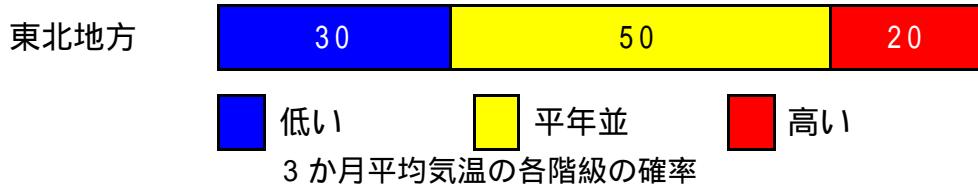


東北地方 3 か月予報 (3 ~ 5 月) の解説

平成 13 年 2 月 20 日 仙台管区気象台

1. 予想される天候

(1) 3 か月平均気温の予想される各階級の確率 (%)



[概要]

3 ~ 5 月の 3 か月平均気温は「平年並」の可能性が最も大きく、その確率は 50% です。「低い」の可能性が次に大きく、その確率は 30% です。「高い」の可能性は小さく、その確率は 20% です。

(2) 可能性の大きな天候の特徴

	3 月	4 月	5 月
天候	天気は周期的に変わり、低気圧の通過後は一時冬型の気圧配置となって寒気が入るでしょう。東北日本海側は平年に比べ曇りや雨または雪の日が多く、東北太平洋側は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。	天気は周期的に変わり、東北地方は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。	天気は周期的に変わり、東北地方は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
気温	平年並	平年並	平年並
降水量	東北日本海側 多い 東北太平洋側 平年並	平年並	平年並

なお、3 ~ 5 月の 3 か月間の東北地方の降水量は「平年並」でしょう。

<参考資料>

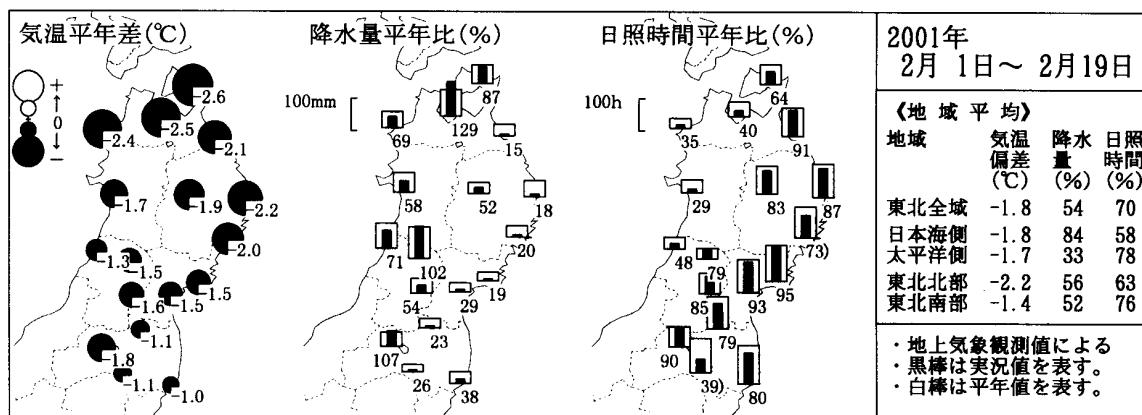
平年のおおよその天気出現日数 (日)

	3 月		4 月		5 月	
	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側
晴れの日	13	20	17	18	18	18
雨の日	14	8	11	9	10	9

注：季節予報では、「日照率 40% 以上の日数」、「日降水量 1mm 以上の日数」をそれぞれ晴れの日、雨の日の目安として用いている。この 2 つの事象は同じ日に起こりうるため、両方に数えられる日もある。なお、日照率は 1 日の日照時間を可照時間（太陽の中心が東の地平線に現れてから西の地平線に没するまでの時間）で割った値である。

2. 最近の天候経過と循環場の特徴

(1) 最近の天候経過



東北地方における2月(1~19日まで)の平均気温、降水量、日照時間平年差(比)

2月(19日まで): この期間の平均気温平年差は、東北地方で-1.8と平年を下回った。降水量平年比は、東北日本海側で84%、東北太平洋側で33%と共に平年を下回った。日照時間平年比は、東北地方で70%と平年を下回った。

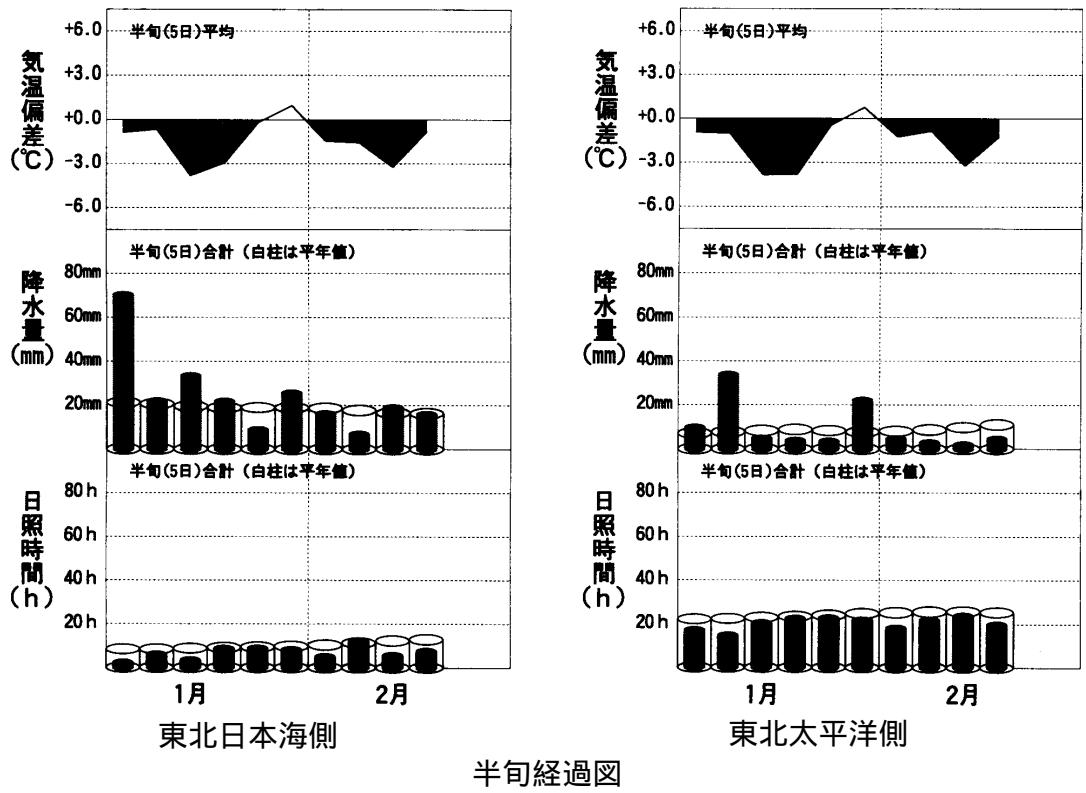
上旬は、1日に低気圧が発達しながら通過したため、東北地方は全般に雨や雪となった。その後4日にかけては冬型の気圧配置が続き、東北日本海側は雪となったが、東北太平洋側は3日に雪の所が多かった他は概ね晴れた。5日以降は気圧の谷が次々に通過し、東北日本海側は曇りや雪の日が多かったが、東北太平洋側は7~8日に南部で雪となった他は概ね晴れた。

上旬の平均気温平年差は、東北地方で-1.2と低かった。降水量平年比は、東北地方で54%と少なかった。日照時間平年比は、東北北部で68%とかなり少なく、東北南部では87%と少なかった。

中旬(11~19日)は、11日に気圧の谷が通過した後冬型の気圧配置が続いた。また、16日や18日にも気圧の谷が短い周期で通過し、その後は冬型の気圧配置となった。このため、東北日本海側では曇りや雪の日が続き、東北太平洋側では概ね晴れた。

また、中旬は東北地方に強い寒気が入ったため、気温がかなり低い状態が続いた。

中旬(11~19日)の平均気温平年差は、東北地方で-2.3と平年を下回った。降水量平年比は、東北地方で54%と平年を下回った。日照時間平年比は、東北地方で68%と平年を下回った。

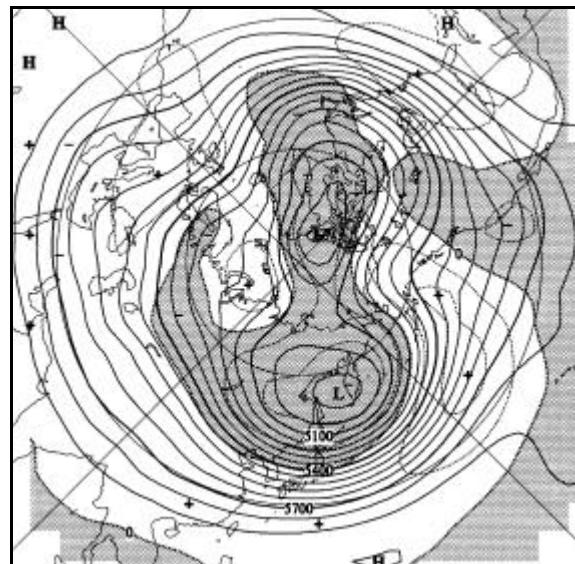


半旬経過図

(2) 中・高緯度の循環

2月(19日まで): 500hPa高度場では極渦は2つに分かれ、極渦の1つはグリーンランドの西にあったが、もう1つはオホーツク海にあって強く、極東域に負偏差域が広がった。北日本はこの負偏差域に覆われた。一方、太平洋には正偏差域があって一部が日本の南にのび、東日本以西はこれに覆われた。

このため、北日本では1月に引き続き寒気が南下しやすい場となり、中旬を中心に厳しい寒さが続いた。



2月1~19日平均500hPa天気図

等高度線間隔60m

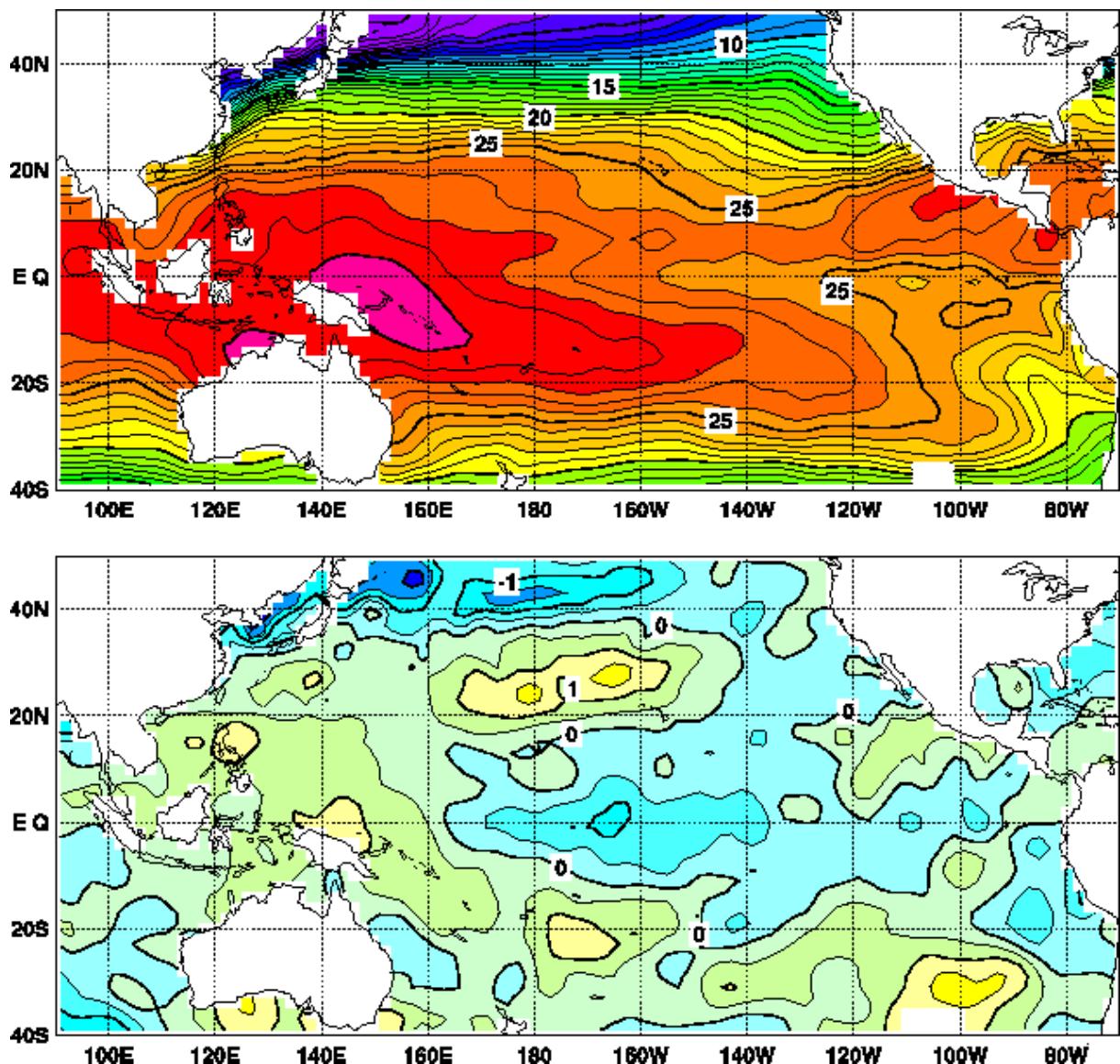
陰影部は平年より高度が低い領域

(3) 热帯太平洋の状況

エルニーニョ監視海域（北緯4度～南緯4度、西経150度～西経90度）の1月の海面水温の基準値（1961～1990年の30年平均値）との差は、-0.3であった。

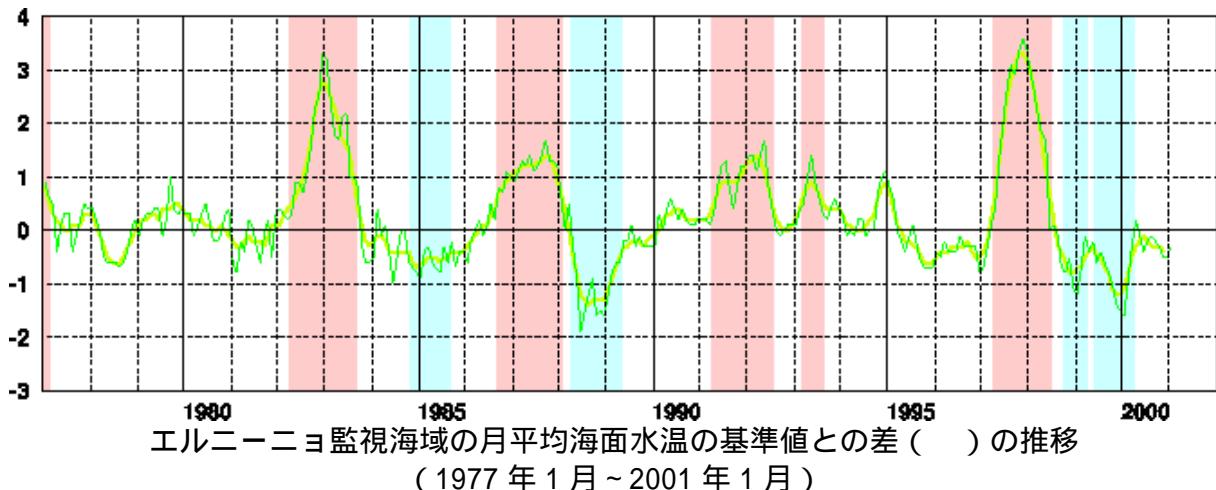
1月の太平洋赤道域の海面水温は、東経170度から西経135度にかけてと、西経110度付近および西経95度付近で平年より0.5以上低く、西経170度から西経165度にかけて-1以下の負偏差が見られた。一方、東経130度から東経160度では平年より0.5以上高く、東経135度から東経150度にかけて+1以上の正偏差が見られた。

1月の南方振動指数は+0.8であった。（南方振動指数は貿易風の強さの目安であり、正（負）の値は貿易風が強（弱）いことを示す。）



2001年1月の海面水温図（上）及び平年偏差図（下）

海面水温図の太線は5毎、細線は1毎の、平年偏差図の太線は1毎、細線は0.5毎の等值線を示す（平年値は1971～2000年の30年平均値）。



折線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示し、正の値は基準値より高いことを示す。エルニーニョ現象の発生期間は赤で、ラニーニャ現象の発生期間は青で、それぞれ陰影を施してある（基準値は1961～90年の30年平均値）。

(4) エルニーニョ現象等の今後の見通し（2001年2月～2001年8月）

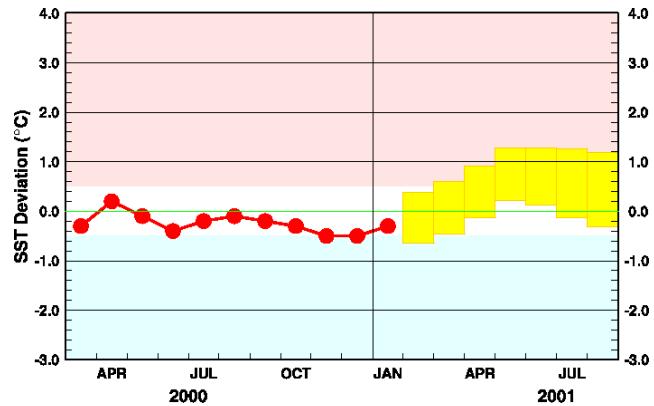
エルニーニョ監視海域の海面水温は、春に基準値（1961～1990年の30年平均値）を上回る状態に移行し、夏は基準値よりやや高い状態で経過する可能性が大きいと予測される。

【解説】

1月のエルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差は-0.3、南方振動指数は+0.8と、数値的には太平洋赤道域の海面水温や貿易風の状況は昨年秋から大きな変化が見られない。一方、太平洋の赤道に沿った海面から深度260mまでの平均水温平年偏差の経度-時間断面図では、昨年末から日付変更線以東での負偏差の弱まりと、以西での正偏差の強まりが見られる。

エルニーニョ予測モデルは、監視海域の海面水温が今後次第に基準値を上回る状態に変化し、夏は基準値よりやや高くなると予測している。

モデルの予測結果や、最近の太平洋赤道域の表層水温の変化から、エルニーニョ監視海域の海面水温は、春に基準値を上回る状態に移行し、夏は基準値よりやや高い状態で経過する可能性が大きいと予測される。



エルニーニョ予測モデルによる
エルニーニョ監視海域の海面水温偏差予測
この図は、エルニーニョ監視海域の海面水温（基準値との差）の先月までの推移（折れ線グラフ）とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測（ボックス）を示している。各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。
(基準値は1961～1990年の30年平均値)

3. 前回（1月22日）発表の3か月予報からの変更点

3月 気温	高い	平年並
3月 降水量	東北太平洋側	多い
		平年並